

編集後記にかえて

博士後期課程のゼミの一環として私たちが書き進めてきた「レビュー論文」が、一冊の本として刊行されるはこびとなりました。編集の事務作業にあたってきた私たち実行委員4名は、同時にレビュー論文を執筆した執筆者でもあり、自身の論文の初稿を書き始めた昨年の春以降、執筆から編集作業まで1年以上の時間を費やしてきたこととなります。執筆者の中には、既に博士論文を提出し終えていたり、いよいよ博士論文提出間近という諸先輩も含まれていますが、私たち実行委員にとっては、博士後期課程1年目に書いたレビューが世に出ることとなります。研究の第一歩はこれまでに行われてきた研究を知ることだと言われていますが、このようなレビューを世に出せたことで、私たちもやっと研究者としての第一歩を踏み出せたような気がします。

ゼミでは、池田玲子さん（本号収録）が研究しているピアレスポンスの技法をそのまま大学院のゼミにとりいれ、毎回発表されるレビュー論文について3人程度の学生が査読者となるというピアレビューの形がとられました。執筆者はピア査読者からのコメントや質問に対して回答集を作った上で、さらに白熱した議論が交わされ、ある時は叩きのめさるもしました。私たち学生の査読者ぶりもなかなかのもので、どの論文に対しても、情け容赦のない厳しいコメント・質問が突きつけられていました。もちろん、論文を投稿したあとの外部査読の段階では、「プロの眼」でさらに厳しく叩かれたことは言うまでもありません。このように、打たれ続けて完成させた論文集ですので、この論文集を読んでくださった皆様が、さらなる厳しいコメントを送ってくださることを切に願って、個々の論文の最後には、Eメールアドレスをつけさせていただきました。

編集活動にあたっては、本作りの素人集団として、ここまでこぎつけての正直な感想は、1冊の本を世に出すことがこんなにも大変なこととは…、ということです。ただ、やはり、ブロードバンド時代になっていたおかげで、かなり効率的に作業が行えました。校閲等の編集のピークにあたる時期がゴールデンウィークにあたったこともあり、編集委員間の打ち合わせや原稿のやりとりなどがしにくいのではと心配していましたが、それらすべてをインターネットを通じてオンラインで行うことができました。そのおかげで、打ち合わせのために時間をさいて集まることも数回のみで、紙に印刷した原稿をやりとりすることは、ほとんどありませんでしたが、一昔前だったら、こうはいかなかったと思います。

ただ、素人集団の暗中模索的な編集作業であったため、一度決まったことが二転三転することも珍しくなく、論文執筆者を混乱させてしまうことも度々ありました。反省する点も多々ありますが、次回のレビュー論文集発行では（発行があることを信じています）、私たちの苦い経験が生かされてくれることを願っています。

最後になりましたが、ゼミの担当教官先生および各章の「解説」をご寄稿くださった先生方からは厳しく、示唆に富むご指導をいただきました。外部査読協力者の先生方からも

多くの貴重なコメントをフィードバックしていただきました。外部査読は **double blind review** 方式を厳密に守って行なわれましたので、それぞれの論文原稿に対して懇切なコメントと修正意見をくださった先生に対し、執筆者から個別にお礼を申し上げる術はありませんが、この場を借りて、御礼申し上げます。

また、さびしい大型連休や週末を家族に過ごさせてしまったり、大きな忍耐を強いてしまったりした実行委員もいました。この編集作業を行うにあたり、陰の功労者となってくれた私たちの家族（特に忍耐強いパートナー諸氏）には、心からの感謝を伝えたいと思います。

編集事務局実行委員

林美善 齋藤浩美 峯布由紀 谷内美智子